

文 献

- 1) 道家, 齊藤: 第1回原子力シンポジウム C-15 p. 738 (1957).
- 2) E. Tazima, & T. Doke; Research in the Effects and Influences of Nuclear Bomb Test Explosions p. 125.
- 3) 川野実氏からの private communication.
- 4) E. Fedorov & V. Baranov; United Nations

- document A/AC. 82/G/R. 39.
- 5) E. Tsvoglou, H. Ayer & D. Holaday; Nuclonics No. 9 p. 40 (1953).
 - 6) E. Tsvoglou; International Conference on Peaceful Uses of Atomic Energy in Geneva. Vol. 13 p. 237 (1955).
 - 7) U. Fachini & A. Malucini; Il Nuovo Cimento Vol. 2 p. 340 (1955).
 - 8) 川野実; 科学 Vol. 27 No. 6 p. 277 (1957).

【書 評】

齋藤 行正 著 「海水, 海流, 潮汐」

(新B 6 254頁 海文堂 昭和34年刊, 400円)

わが国にはこれまで海洋学の専門的な教科書が少なく, また現在出版されているもののほとんどが戦前に書かれたものである。たとえば海洋物理関係についていえば, 最近の出版物としてはわずかに日高博士の著「海流」があるばかりである。この点で齋藤博士が執筆された本書は戦後の大きなブランクを埋める役割を果たすものといえよう。

本書は海洋学の物理的部門に対する総合的な教科書として書かれたもので, 海水の物理的性質とその変化, 海洋の熱収支, 海洋の循環と内部構造, 海流, 波, 潮汐などについてそれぞれ専門的な記述がある。説明もかなりていねいであって, 理解しやすい。また基本的な事項と参考的またはやや難解な事項とは活字の大きさを変えるなどの配慮がなされている。

たゞ, 著者は昭和24年神戸海洋気象台を去られてから

研究対象がおもに海洋底の地殻構造の方に移り, そのためか, 特に海洋力学の部門に対する記述内容がやや古いのが気がかりである。特に海流の項で数年前発行された日高博士の「海流」にもすでに書かれている重要な事実でぬけている点が多いようである。たとえば, スヴェルドラップやストーンメル等の研究によって海流観に大きな変遷が起っていることについてほとんど説明がなされていない。また波の項でも有義波の理論の解説までに止り, 最近のスペクトル理論にふれられていないのは残念である。

更に潮汐の項について云えば説明が大西洋, その他の外国の例にかたより, 日本近海の潮汐についての説明が少ない。しかし, 読者特に航海関係者は日本近海の潮汐現象についての理解を求め, また必要とするのではなからうか。

(宮崎正衛)

【書 評】 佐藤武夫著「森林と水の理論」森林資源総会对策協議会グリーンエイジ編集室

B 6 版 296頁 定価 350円 1959年9月25日発行

先に, 「水害論」(三一書房)で, 水害は社会現象であると喝破された著者は, この本でも, 治山治水におけるいろの問題点をめぐりひろげて見せる。内容は3部にわかれ, 第1部治山と林業, 第2部川と水害, 第3部川と利水となっている。前著「水害論」のように, 一冊の本として書きおろしたものでなく, いろいろの機会に発表された論文を, 各標題の下に収録したものである。そのため, 各部, 章間に重複している所もあるが, 個々の

章で完結される論文を, テーマによって整頓されているため, 個々の問題点については良く理解しやすい利点がある。「水害論」と併読するなら, 著者のいわんとする所が, さらに鮮明になるだろう。

著者の, 社会現象としての災害の実体を明らかにしようとする熱意と, その災害に対する絶え間ない闘いを続けている情熱に対し, 心から敬意を表するものである。

(奥田 種)